

漂流談

本縣下益城郡網津村大字住吉の伊澤彌喜太なる冒險漢が龜に八重山島より台湾の僻なる無人島、兒嶋島に航せんとするの海上難風に逢ひ幾度か死までまた生くるの危難を經て遂に支那の福建に漂着幸ひに一命を拾ひ得たる事は概略報して曩日の紙上に在りき而して此の多幸なる冒險漢は此頃支那より長崎を経て恙なく郷里に歸り一昨日熊本に來れり依て之を我社に延きて其談を求めしに彼れは始め琉球に赴きしより以來今回逢難の事に至るまで落もなく詳細に物語り語りて其海上難風に吹き漂はされ數日間山を見ざるの所に至れば幾度か「實に困りました」との語は其唇頭より迸り出で慘憺の色は自ら眉宇の間に顯はれ聴く者をして或は驚き或は恐れ席の進むを覺へざらしめたりき彼れは年方に四十、壯軀肥大ならざるも筋肉堅く締りたる如く頗る強健の質を備へたるに似たり言語明晰にして應對秩序を失はず數時間の談話毫も本末を紊ることなかりき彼れは家に兩親あり四弟あり者な徒在なりと而もて彼れは未だ妻を娶らずと云ふ四十家を爲さざるの徒か自ら云ふ十日を出で引して再び琉球に赴き遂に無人島に航せんとも其冒險の氣象尋常の及ぶ所にあらずを見るべきなり左に其の談話を記せん曰く

余は嘗て小倉鎮盛に在りて看護卒たり十八年五月分遣隊に従ひ沖繩縣那覇に赴きたるが十九年一月之を辭して同地の縣立病院の藥局に従事し二十年八月之れを辭して三井物産會社の設置せる西表島(八重山群島の一)炭坑事務所の所屬なる病院の藥局に入りしも同所は二十二年十月に至て其開掘を中止し事務所を引き拂ひしかは余も亦た那覇に歸り小林病院長

に面會したるに頭書の由縁所由を尋ねしに暫く同地に居る所方までは何れの相談も渡りに船の島地して之れに従ひ自ら同地に至りて事務に服せらるるが二十三年二月に至り郷里より急報ありては「親なりとの事に驚かさざれ暫時の暇を乞ふ」と隨着したり家に留まりて看養するが一日にして父は全く愈へたれども其外は病留長延ひし爲め再び那覇に赴き辭表を出し、それより八に頗るまた硫黄販賣の用を帯び長崎に赴き同年十一月又た西表島に渡航せり  
初め西表島に在りしところ盛灣を距る遠からざる所に兒嶋島と稱する無人嶋あり信天翁群簇せり嘗て人あり其島の羽毛を抜きて之を横濱に送りて頗る外人の好評を得たり又た其周囲の近海には魚族群生して漁獲の利甚だ多まど聞き余は一ひは探檢の爲め之に渡航せんと志せしも時機未だ至らず準備整せざりしかば遂に其志を達するを得ず常以て憾みと爲せしが幸ひにして今回は炭坑事務所員三谷伊平、鹿兒島人松村仁之助、今永井喜左衛門の三人余の志を贊して其經画を助けんと誓へり是に於て余は柔志の漸く達せんとするを喜び奮勵して渡航の準備に着手せたるが幸ひにして同地には一艘の石炭船あり船非は堅牢なるも甚だ大なるものに非ず新造の時は一萬斤を積みたれども今は稍々老ひて六千斤を容るゝに足るのみなり之を以て洪波大濤の間を渡さず未知の航路をたざりて無人島に達せんとするに誰か危険なりとせざるものあらん左れども余の胸裡に炎々たる希望の氣は全く畏怖逡巡の念を燒き尽して毫も前路の危難を知らず之れに搭載するに米、酒、醬油、味噌、等の飲食品及び日常の器物にして此の行に欠くべからざる者を以てし余は六名の漁夫と共に之れに乗り込めり六名の漁夫は皆な系譜と稱し琉球土人の一種にして最も漁獵に熟す居常殆ど海を以て家となじ其冒險の膽氣ある余等の及ぶ所に非ず余の之を雇ふるゝや一種の約束を結びたり彼等は獨木船一艘及び魚釣船一艘を出し余は之れが附を弁し利益は等分にするに是れなり斯くて八月二十九日西表島を發して先づ與那國に向ふ余等の爲め永井喜兵衛門が同地に買ひ込み置き米を積み込まんが爲めなり(つゝ、)

明治 26 年 10 月 8 日付九州日日新聞

「漂流談」 1

●漂流談 (※その 1)

本県下益城郡網津村大字住吉の伊澤弥喜太なる冒険漢が曩に八重山島より台湾の隣なる無人島、児場島（魚釣島のこと）に航せんとするの海上難風に逢ひ幾度か死してまた生くるの危難を経て遂に支那の福建に漂着し幸ひに一命を拾ひ得たる事は概略報して過日の紙上に在りき而して此の多幸なる冒険漢は此頃支那より長崎を経て恙なく郷里に帰り一昨日熊本に來れり依て之を我社に延きて其談を求めしに彼れは始め琉球に赴きしより以來今回逢難の事に至るまで落もなく詳細に物語れり語りて其海上難風に吹き漂はされ数日間山を見ざるの所に至れば幾度か「実に困りました」との語は其唇頭より迸り出で慘憺の色は自ら眉宇の間に頭はれ聴く者をして或は驚き或は恐れ席の進むを覺へさらしめたりき彼れは年方に四十、体軀肥大ならざるも筋肉堅く締りたる如く頗る強健の質を備へたるに似たり言語明晰にして応対秩序を失はず数時間の談話毫も本末を紊ることなかりき彼れは家に両親あり四弟あり皆な健在なりし而して彼れは未だ妻を娶らずと云ふ四十家を為さざるの徒が自ら云ふ十日を出でずして再び琉球に赴き遂に無人島に航せんと其冒険の氣象尋常の及ふ所にあらざるを見るべきなり左に其の談話を記せん曰く

余は嘗て小倉鎮台に在りて看護卒たり十八年五月分遣隊に従ひ沖縄県那覇に赴きたるが十九年一月之を辞して同地の県立病院の薬局に従事し二十年八月之れを辞して三井物産会社の設置せる西表島（八重山群島の二）炭坑事務所の所属なる病院の薬局に入りしも同所は二十二年十月に至て其開掘を中止し事務所を引き払ひしかは余も亦た那覇に帰り小林病院長に面会したるに頭喜の出張所に人を要すれば暫く同地に赴き助力しては如何との相談、余も渡りに船の心地して之れに従ひ直ちに同地に至りて事務に服せるうち、翌二十三年二月に至り郷里より急報あり老父病氣なりとの事に驚かされ暫時の暇を乞ふて匆匆帰省したり家に留まりて看病すること八十余日にして父は全く癒へたれども意外に滞留長延ひし為め再ひ那覇に赴きて辞表を出し、それより人に頼まれて硫黄販売の用を帯ひ長崎に赴き同年十一月又た西表島に渡航せり

初め西表島に在りしころ台湾を距る遠からざるの所に児場島と称する無人島あり信天翁群族せり嘗て人あり其島の羽毛を抜きて之を横浜に送りしに頗る外人の好評を得たり又た其周囲の近海には魚族群生して漁獲の利甚だ多しと聞き余は一ひは探検の為め之れに渡航せんと志せしも時機未だ至らず準備熟せざりしかば遂に其志を達するを得ず常に以て憾みと為せしが幸ひにして今回は炭鉱事務所員三谷伊平「伊兵衛」、鹿児島人松村仁之助、同永井喜左衛門の三人余の志を賛して其計画を助けんと誓へり是に於て余は素志の漸く達せんとするを喜び奮躍して渡航の準備に着手したるが幸ひにして同地には一艘の石炭船あり船体は

堅牢なるも甚た大なるものに非ず新造の時は一万斤を積みたれども今は稍々老ひて六千斤を容るるに足るのみなり之を以て洪波大濤の間を凌ぎ未知の航路をたどりて無人島に達せんとするは誰か危険なりとせざるものあらん左れども余の胸裡に炎々たる希望の焰は全く畏怖逡巡の念を焼き尽して毫も前路の危難を知らず之れに搭載するに米、酒、醤油、味噌、等の飲食品及び日常の器物にして此の行に欠くべからざる者を以てし余は六名の漁夫と共に之れに乗り込み六名の漁夫は皆な系満と称し琉球土人の一種にして最も漁獵に熟す居常殆ど海を以て家となし其冒険の肝気ある余等の及ふ所に非ず余の之を雇入るるや一種の約束を結ひたり彼等は独木船一艘及び鱒釣船一艘を出し余は之れが賄を弁し利益は等分にするは是れなり斯くて八月二十九日西表島を發して先つ与那国に向ふ余等の為め永井喜兵衛門が同地に買ひ込み置きし米を積み込まんが為めなり（つづく）